

臨床麻酔レジデントマニュアル

古家 仁 編

川口昌彦, 井上聡己 編集協力

＜書評者＞ 並木昭義 (札幌医科大学教授・麻酔学)

今年の6月に医学書院から『臨床麻酔レジデントマニュアル』が発刊された。この本の編集執筆を奈良県立医科大学麻酔学教室に依頼されたことは最適な選択であった。編集責任者の古家 仁教授は日本麻酔科学会常務理事として、日本の麻酔科および麻酔科医に現在そして将来何が必要かを十分に理解している。その教室は術中の麻酔業務だけでなく、術前、術後の周術期管理に熱心に取り組んでいる。そして研修医、若手麻酔科医に臨床麻酔の知識、技術を習得させるだけでなく、患者への接し方および他科医師、看護師への対応などの教育にも力を注いでいるからである。

今回発刊された本はポケット版のマニュアル本であるが、臨床麻酔に必要な内容がほぼ網羅されている。しかも簡潔な表現で図表も多く用いて理解しやすくしてある。このような本ができたのは編集協力者の川口昌彦准教授、井上聡己講師および執筆に携わった29名の教室員皆さんの努力と頑張りによる。

この本からは、各執筆者らが臨床現場で研修医や若手麻酔科医が何を求めているかよく知っているということや、その知識と技術を伝えたいという彼らの意気込みが伝わってくる。自分で書いたものを用いて指導に当たることは執筆者にとって嬉しいことだけでなく、自分の勉強と励みになる。

この本は、序章、本文8章、付録、コラムから構成される。序章では、麻酔科研修と麻酔科専門医への道が書かれている。第1章は「臨床麻酔のための薬理学」で、各種麻酔薬、麻酔関連薬など6項目から成る。第2章は「術前評価」、前投薬などの術前対応など10項目から成る。第3章は「麻酔管理に必要な手技」で、麻酔器の始業点検、吸入および静脈麻酔法、気道確保に必要な各種方法や器具、輸血輸液法、各種神経ブロック法、救命処置など10項目と広範囲にわたり書かれている。第4章は「モニタリング」で、基本モニターをはじめ筋弛緩、経食道心エコー、麻酔深度など8項目を取り上げている。第5章は「合併症とその対

策」で、低酸素血症、肺塞栓症、アナフィラキシーなど日常臨床でよく遭遇する11項目を挙げている。第6章は「比較的频率が高い留意すべき症例」で、37項目を挙げており、日常臨床において必要な症例がほぼ網羅されており、その内容もよく書かれている。第7章は「術後管理」で、術後訪問から術後管理、合併症対策など6項目が書かれている。第8章は「麻酔と危機管理」で、ヒヤリハット、災害時の対応、麻酔事故への対応など5項目からなる。

付録は臨床麻酔の現場に携わる者にとって必要な知識を図表を多く用いて簡潔にまとめられており、大変有益である。文中の適所に「what would you do?」という27のコラムが入っている。この内容は現場の人間が関心があり、かつ重要な問題を取り上げ、適切に解説されており参考になる。

この本はポケット版であるが、その内容の質は通常の教科書に引けをとらないものがあり、研修医、若手麻酔科医だけでなく、指導に当たる専門医も是非手元に置き、大いに活用することを薦める。

●B6 変 頁 320 2008 年
定価 3,990 円
(本体 3,800 円 + 税 5%)
[ISBN978-4-260-00617-0]
医学書院 刊